

行って きました!

JASPO (臨床腫瘍薬学研究会)
第1回ブラッシュアップセミナー

薬剤師が一丸となり、 最良のがんケアを

いまや、がんは2人に1人が罹患するとされ、経口抗がん剤も増えてきたことから、一個人としても薬剤師としても、決して避けて通ることのできない身近な疾患になったと言えます。一方、身近とはいえ重篤な疾患であり病態も多様であるため、つい敬遠しがち、という方も多いと思います。そこで、薬剤師同士で情報交換し、勉強や研究を重ねていく場として、2010年に臨床腫瘍薬学研究会 (Japanese Society of Pharmaceutical Oncology; JASPO) が設立されました。

今回は、「第1回ブラッシュアップセミナー」の様子をご報告します。

【取材・文責 PT編集部 池田さやか】



“Best Cancer Care by All Pharmacists !”

JASPOの「第1回ブラッシュアップセミナー」は、2011年6月25日(土)に明治薬科大学にて開催された。なお、翌26日(日)には初学者向けとして、よりベーシックな講義からなる「第1回スタートアップセミナー」も開催。両日参加された方も含め、参加者数はそれぞれ280名、418名であった。

◆ 第1幕(シンポジウム): 薬薬連携に向け、共に前進

がん薬物療法では、副作用の支持療法薬や経口抗がん剤の処方と服薬管理のため、スムーズな薬薬連携が求められる。そこで第1幕のシンポジウムでは『がん化学療法における薬薬連携の実際』との主題のもと、がん専門病院薬剤師、総合病院薬剤師、保険薬局薬剤師に加え、薬局経営者かつ医師、行政官と、多彩な立場からの講演が行われた。

薬薬連携のためのツールとして、松井礼子氏(国立がん研究センター東病院)から同院で作成・提供している「情報提供書」が、縄田修一氏(横浜市立大学附属市民総合医療



第1幕の総合討論。左奥より松井氏、縄田氏、大江氏、狭間氏、中井氏



濃密なプログラムが続く中、真剣に聞き入る聴講者の皆さん。「寝てる人はいないかな」と、こっそりチェックしてみました。見当たりませんでした(驚)!



終了後、大事な「生涯研修認定単位(シール)」を受領。今回は1単位に相当

JASPO (臨床腫瘍薬学研究会) 概要

- 設立年** 2010年10月
- 目的** がん薬物療法に携わる全ての薬剤師が、他の職種と協力してがん治療に携わるための専門的知識の共有と、連携の強化、新しい知見の創造をもって、がん医療に寄与し国民生活の向上を実現すること (同研究会HP「会長あいさつ」より抜粋)
- 個人会員年会費** 正会員4,000円(学生会員2,000円)
- 正会員数** 389名(病院薬剤師328名、保険薬局薬剤師27名、他) ※2011年6月現在
- 事務局** 明治薬科大学 医薬品安全管理学
jaspo-office@umin.ac.jp

第1回研究会総会(予定)

- 開催日時:** 2012年3月17日(土)、18日(日)
- 開催場所:** ニッショーホール 日本消防会館

センター)から同院で使用している「お薬手帳用治療レジメンシール」が紹介された。これらは、薬剤師が互いに情報を共有できるだけでなく、患者さんやその家族が、正し

く治療情報を理解していくうえでも有用なツールとなる。
 一方、多くの薬剤師が必要性を理解しつつも、現状では薬薬連携が十分に機能していないことが認識されている。専門病院側の問題点として松井氏は、アンケートを行った結果「情報提供しているつもりでも、保険薬局の9割が情報不足と感じていることがわかった」と課題を提起した。また、保険薬局側の問題点として大江真由美氏（開成堂石渡薬局）は「知識不足、プロ意識不足、医療情報不足、患者とのコミュニケーション法が分からない」と自戒したうえで、自分から積極的に学んでいくことの大切さを語った。

そのような中、狭間研至氏（ファルメディコ株式会社）は米国の共同薬物治療管理業務（CDTM）を参考に「薬剤名のみ医師が決定し、投与量・方法・期間は薬剤師が判断しては」と提言し、薬剤師の役割にはまだ可能性が広がっていることを示唆。中井清人氏（厚生労働省医薬食品局・総務課）からは「薬剤師の活躍が、どれだけ患者の利益となっているかをエビデンスとしてまとめる必要がある」と、行政を動かすためのコツが示された。

◆ 第2幕（一般口演）： わが国初の薬剤師主導臨床試験！

第2幕では『制吐剤適正使用における薬剤師による臨床研究の試み』と題し、静岡がんセンターの鈴木賢一氏から制吐薬の二重盲検ランダム化第Ⅲ相試験「TRIPLE」が紹介された。抗がん剤開発では徐々に医師主導の臨床試験が増えてきたが、TRIPLE試験は副作用の支持療法薬を対象に行われるわが国初の薬剤師主導臨床試験であり、本年3月に登録を開始したところである。試験の詳細を解説し、結語として「薬剤師は今まで、構築されたエビデンスに基づき処方するのみだったが、これからはエビデンスを生み出す立場となりたい」と志を述べた。



◆ 第3幕（特別講演）： “薬の専門家”として大きく期待

最後の講演は、国立がん研究センター東病院・臨床開発センター長としてわが国の抗がん剤臨床試験をリードしている大津敦氏によ



る『消化器癌における臨床試験のこれまでとこれから』であった。大津氏は、本年の日本臨床腫瘍学会（JSMO）学術集会・大会長でもある。がん治療最前線の視点から、「がん治療は医師のみでは成し得ない」とし、「抗がん剤を含む医薬品の専門家として薬剤師の皆さんには、がん治療チームの主力として活躍していただきたい」と励ましの言葉を送った。



以上のように、セミナーを通してがん薬物療法の現状を勉強するとともに、さまざまな視点からわが国のがん医療において薬剤師がいかに必要とされているかが語られ、改めてその役割の重要性を認識する貴重な機会となった。

Note. ここに注目!

勉強会、参加の意義は“質疑”にあり?!

紙幅の都合上、詳細は省略しましたが、今回のブラッシュアップセミナーでは全3幕とも質疑応答のための時間が設けられ、参加者から次々と積極的な質問が投げかけられていました。

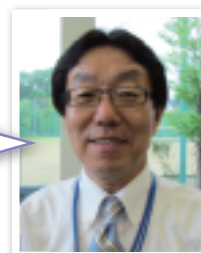
ところで皆さんは、勉強会や学術集会に参加した際、質疑を行ったことはありますか？重要な講義や発表の後は、必ずと言ってよいほど質疑応答の時間が設けられています。本当は質問したいことがあっても、「あまりにも初歩的な内容かな・・・」、「私の質問で時間を割いてしまうのは申し訳ない」など逡巡し、結局、挙手できないという方も多いと思います。でも、実はあなたの質問は、とっても鋭いものかもしれません。また、質疑応答に参加することで、その時間に聴講した内容が、より深く身に定着することになります。次の勉強会・学術集会に参加する際には、是非“質疑”に挑戦してみてください。



会長からのメッセージ

JASPOのキャッチフレーズは「Best Cancer Care by All Pharmacists!（全ての薬剤師で、最良のがんケアを）」。薬剤師が、互いに勉強し、連携し、研究し、それを臨床で活かしていける会としていきたいです。がん患者さんは、1つの病院に少なくとも1人はいらっしゃるはず。非常に専門性の高い「がん専門薬剤師」とまではいかなくても、今より少しがん治療の知識を増やすだけでも患者さんのお役に立てるはず。また、それは自分にとっても新たに大きな遣り甲斐となるはず。

JASPOは設立されたばかりで、会員は病院薬剤師がほとんどを占めていますが、保険薬局薬剤師にも是非、ご参加いただきたいと思います。「がん治療はわからない」、「がん患者さんと、どう接してよいかわからない」と、自ら遠ざかるのではなく、積極的に高い意識を持ち、ともに進んでいきましょう。



遠藤一司氏
（明治薬科大学）